

この度、「寺院しおり」をPDFデータにて掲載させて頂くこととなりました。

このしおりは、寺院様のご協力を得て寺院の成立から今日迄の歴史を探り、又、寺院の景観、本尊、諸仏像、什物を一冊の本にまとめたものです。

この「寺院しおり」は寺院様のご協力により**光陽美術** / (有)光陽フォト・オフィスが製作しております。

お寺の歴史は地域の歴史と密接に関わり、その土地や歴史を知る大変貴重な資料であるという思いから皆様にもご覧いただけるよう公開させていただくこととしました。

スキャンによる作業を行ったため、必要な箇所をお読みいただくに際し、少々取り扱いにくいものもございますが、何卒ご了承下さい。多少なりともお役に立てていただければ幸いです。

※ PDF ファイルのリンク先はネットワークの状況により予告なく変更する場合があります。誠に申し訳ございませんがPDF ファイルへの直接リンクはご遠慮下さいますようお願い申し上げます。

また、著作権等は放棄しておりませんので、掲載されている文章・写真の無断使用・転載などはご遠慮願います。

この「寺院しおり」PDF データは「**光陽美術** / (有)光陽フォト・オフィス」並びに「**いい寺.jp**」のホームページで掲載されております。

(有)光陽フォト・オフィス <http://coyo.jp>

寺院情報サイト**いい寺.jp** <http://e-tera.jp>



曹洞宗
そうとう

猪頭山

廣濟寺
こうさいじ

奉
修
寺
廣
濟
寺
大
東
亞
戰
後
國
際
宗
教
大
會
會
場
地
石
碑
一
九
五
五
年
十
月
立
石

廣濟寺



開基

行基にまつわる言い伝え

廣濟寺は寺伝によると、もともとは律宗であったという。

律宗とは、奈良時代の天平勝宝五年（七五三）唐の高僧として名を馳せた鑑真（六八七〜七六三）が日本に渡ってきて広めた仏教の宗派である。南都六宗の一つとされ、戒律の研究や実践を主とすることで知られる。

鑑真は海難や失明など艱難辛苦の末に來日し、東大寺に戒壇を設け、のちに戒律道場として唐招提寺を建立した。

当寺には、聖武天皇の御代、天平年間（七二九〜七四八）行基菩薩の作と伝えられる釈迦仏（釈迦如來）を本尊として創建されたとの言い伝えもある。



山門（大正八年建立）



参道

弘法大師と円仁にまつわる 釈迦堂と尊像の言い伝え

寺伝によると、のちにこの地を訪れた弘法大師が梵宇（寺のこと）を建て、釈迦堂と号したという。

弘法大師とは空海の諡号（死後に贈られる称号）である。

空海（七七四〜八三五）は日本真言宗の開祖として知られる高僧である。唐に渡って恵果に学び、帰国後、真言密教を平安時代前期の国家仏教として定着させた。

ちなみに真言宗は永遠の宇宙仏である大日如来こそ真実の仏であるとし、即身成仏（生きている間に究極の悟りを開いて仏になること）の教えを説いた。

弘法大師にまつわる伝説は全国津々浦々にある。

当寺には円仁和尚が來往し、さらに八体の

尊像を脇座とし、大檀那である猪鼻公のために安置したという言い伝えがある。

円仁（七九四〜八六四）は天台宗山門派の開祖であり、慈覚大師の諡号でも知られる。やはり唐に渡って天台教学や密教などを学び、帰国後は比叡山興隆の基礎を築いた。

弘法大師と同じように慈覚大師にまつわる伝説や故事が全国各地に残っている。

猪鼻公とは、猪鼻広済（ひな）と称し平安時代にこの地を治めた稗貫一族の地頭で二百石を領していた。と伝えられる。

敬虔な仏教の信徒だった猪鼻公は、大檀那



開基 広済寺殿 位牌

（多くの布施を喜捨する有力な檀家）として当寺（釈迦堂）の発展に尽くした人物と考えられる。

律宗から禅宗へ改宗

慶長年間（一五九六〜一六一四）京洛（京都のこと）の徳岩宗久禅師が奥州に下向したとき、この地にやってきた。

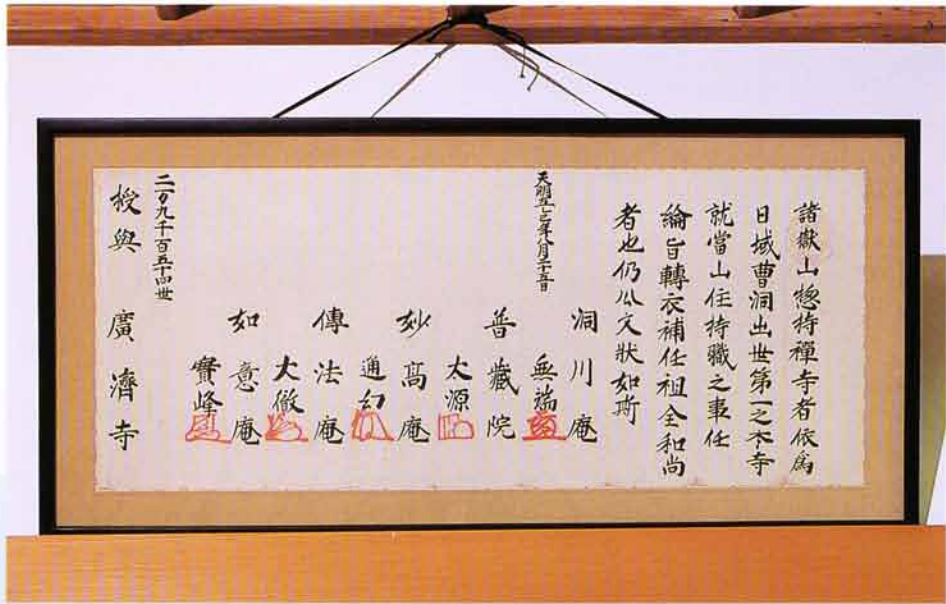
徳岩宗久禅師は旧村内の北古屋という地に釈迦堂を移し、南部一族の北家、遥拝所とした。このとき律院を改めて禅苑とした。つまり



三界萬靈位牌（元禄十二年 八世手製）



山号額（畔上棋仙禅師 書 二十四世代）



御繪旨（天明五年）

律宗から禅宗への改宗を意味している。

禅宗は六世紀前半、達磨が中国に伝えた仏教の一派である。日本には入宋した栄西によって臨済宗、同じく入宋した道元によって曹洞宗、明の隠元が渡来して黄檗宗が伝えられ、三大宗派を形成している。

この時点では禅宗のどの宗派を信奉していたのか定かではない。

このような経緯から、当時では徳岩宗久禅師を中興開山と称している。

これ以降、六世了応白心の代まで洛陽（京都）より住職が継承されている。

廣濟寺の開基

延宝年間（一六七三〜一六八〇）釈迦堂は火災のために大半が焼失してしまった。境内も北上川に近かったことから、洪水で氾濫するたびに被害が出ていた。



本堂（天明三年建立）



寺号額（報恩寺二十四世 偉運契勇 書 二十一世代）

当寺の六世白心和尚はこれを憂い、貞享三年（一六八六）七月、旧釈迦堂が建っていた猪鼻館の地に伽藍を再建した。

このとき寺の名を廣濟寺と改めた。当寺は発祥の地で再興されたことになる。

北家の二代九兵衛公（宣繼）が寺門を復旧させ、開基となった（広濟寺殿北源仁宇大居士）。北家は旧八重畑村関口に知行代官を置いていた。

本尊と脇座

本尊は釈迦牟尼仏である。先に記したように行基の作と伝えられている。

貞享三年（一六八六）京都の仏師須田直之丞によって修復されている。

脇座は慈覚大師の作と伝えられ、明治年間に修復されている。

慶室恕悦禪師が開山

延享二年（一七四五）三月、南部家三十三代の南部利視公は、本寺が明らかでない寺院は廃寺とする旨の通達を下した。

廣濟寺では、南部藩領内の総領で盛岡五山のひとつだった報恩寺七世の慶室恕悦禪師を勧請して開山とした。

十二世水月万江の代、享保八年（一七二三）十一月三日、北家息女月光院殿の導師を勤め、翌九年八月十二日、倫弥公より寺領として四石六斗八升四合が寄進された。

ただしこれらの土地は藩政時代が終わると、明治新政府によって上地（お上に返納すること）される。



須彌壇



普賢菩薩

本尊 釈迦牟尼佛

文殊菩薩



本堂内部

天明の飢饉の際に再興

十六世智山廓勇、十七世安山祖全の代に天明の飢饉が起こった。

天明の大飢饉は江戸時代の四大飢饉として知られ、天明二年（一七八二）から七年にかけて続いた大凶作である。特に三年には浅間山が噴火。その影響もあり奥州では冷害となり、農作物が大打撃を被った。

南部盛岡藩領内でも深刻な飢饉に見舞われ、餓死者や病死者は六万四千人以上にのぼったといわれる。八戸領でも三万人以上が死亡したと伝えられている。土地を捨てて他国へ逃げる領民も続出した。



涅槃図（江戸中期狩野派 十八世代）

このとき旧村内の滝田の新屋敷、晴山伊兵衛（現茂）が当寺に土地を寄進し、東中島の曲田（萬刈田）、佐藤与右エ門（現徳右エ門）が救済事業を兼ねて、一段下の現地に衆寮と本堂を再建した。（衆寮は平成十三年に解体）天明二年〜三年のことである。

このとき使役した人足は延べ三千人にも達したと伝えられる。今日であれば、さしずめ不況対策の公共事業にあたるだろう。当寺では天明の飢饉のとき寺の危機を乗り越え、領民のために尽くした安山祖全を中興としている。天明五年（一七八五）八月二十五日、本山総持寺勅賜輪住を勤め、御綸旨を賜っている（ほかに三通が現存）。



白山妙理大権現（二十四世代）



御鏡観音（開山奉持）



祈禱額（久我通久 書 二十四世代）

当寺の旧釈迦堂跡には、昭和十二年建立の二階造り「多宝塔」がある。これだけの威容を誇る多宝塔を持つ仏閣は極めて珍しい。塔の一階には西国秩父坂東の百体の観音が安置され、二階の輪蔵には大藏経が納められている。これだけ多くのまとまった観音や大藏経が安置されているのは県下にもあまり例がなく、貴重な文化財となっている。



多宝塔（昭和十二年建立）



多宝塔一階内部

山門もなかなか見事なものである。山門の二階部分にはかつて大梵鐘が吊るされていたが、戦時中の金属回収に応じて供出した。その後、昭和五十五年佐藤徳右エ門寄進により元の姿に戻る。平成三年八月柱改修。山門の両側には仁王尊がある。これらは共に二十四世稜岳惠暁の代に建立されたものである。稜岳惠暁は昭和三十四年（二九五九）四月十二日、百三歳の天寿を全うした。



多宝塔二階輪蔵



北家墓所



庭園



現住職 廣濟寺二十七世 川守田 伸樹

〒〇二八―三三三二

岩手県稗貴郡石鳥谷町猪鼻四一五七一
電話 (〇一九八) 四七一三三四〇

曹洞宗について

廣濟寺は曹洞宗の寺である。

曹洞宗の開祖は道元禪師という。道元禪師は鎌倉時代の正治二年（一一二〇）京都で生まれ、十四歳で比叡山に上がり、仏門に入った。二十四歳のときに一念発起して中国（宋）に渡り、生涯の師となる如浄禪師と巡り会った。そこで禅による教え（坐禅）を学び、二十八歳で帰国した。

帰国後、三十四歳で京都近郊に興聖寺を開



松本たかし、つや女、句碑（二十六世 伯母）

き、四十四歳のときに越前（福井県）に大本山永平寺を建立した。

その間、坐禅の修行に専念すると共に広く釈迦の教えを説いた。『正法眼蔵』『普勸坐禅儀』など仏法の神髄を説いた著述を遺し、五十四歳で生涯を閉じた。

曹洞宗では釈迦牟尼を本尊として仰ぎ、永平寺を開いた道元禪師、總持寺を開き、優秀な弟子を多数育て、教えを広めた瑩山禪師（けいざん）を両祖として敬い、「二仏両祖」の教えに照らされた信心の日常を送ることを旨としている。



庭園